

新約聖書 ヨハネによる福音書 11章 1節—45節 (新共同訳)

¹ある病人がいた。マリアとその姉妹マルタの村、ベタニアの出身で、ラザロといった。²このマリアは主に香油を塗り、髪の毛で主の足をめぐった女である。その兄弟ラザロが病気であった。³姉妹たちはイエスのもとに人をやって、「主よ、あなたの愛しておられる者が病気なのです」と言わせた。⁴イエスは、それを聞いて言われた。「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。」⁵イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。⁶ラザロが病気だと聞いてからも、なお二日間同じ所に滞在された。⁷それから、弟子たちに言われた。「もう一度、ユダヤに行こう。」⁸弟子たちは言った。「ラビ、ユダヤ人たちがついこの間もあなたを石で打ち殺そうとしたのに、またそこへ行かれるのですか。」⁹イエスはお答えになった。「昼間は十二時間あるではないか。昼のうちに歩けば、つまづくことはない。この世の光を見ているからだ。¹⁰しかし、夜歩けば、つまづく。その人の内に光がないからである。」¹¹こうお話しになり、また、その後で言われた。「わたしたちの友ラザロが眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く。」¹²弟子たちは、「主よ、眠っているのであれば、助かるでしょう」と言った。¹³イエスはラザロの死について話されたのだが、弟子たちは、ただ眠りについて話されたものと思ったのである。¹⁴そこでイエスは、はっきりと言われた。「ラザロは死んだのだ。¹⁵わたしがその場に居合わせなかったのは、あなたがたにとってよかった。あなたがたが信じるようになるためである。さあ、彼のところへ行こう。」¹⁶すると、ディディモと呼ばれるトマスが、仲間の弟子たちに、「わたしたちも行って、一緒に死のうではないか」と言った。

¹⁷さて、イエスが行って御覧になると、ラザロは墓に葬られて既に四日もたっていた。¹⁸ベタニアはエルサレムに近く、十五スタディオンほどのところにあった。¹⁹マルタとマリアのところには、多くのユダヤ人が、兄弟ラザロのことで慰めに来ていた。²⁰マルタは、イエスが来られたと聞いて、迎えに行ったが、マリアは家の中に座っていた。²¹マルタはイエスに言った。「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。²²しかし、あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています。」²³イエスが、「あなたの兄弟は復活する」と言われると、²⁴マルタは、「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」と言った。²⁵イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。²⁶生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」²⁷マルタは言った。「はい、主よ、あなたが世に來られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております。」

²⁸マルタは、こう言ってから、家に帰って姉妹のマリアを呼び、「先生がいらして、あなたをお呼びです」と耳打ちした。²⁹マリアはこれを聞くと、すぐに立ち上がり、イエスのもとに行った。³⁰イエスはまだ村には入らず、マルタが出迎えた場所におられた。³¹家の中でマリアと一緒にいて、慰めていたユダヤ人たちは、彼女が急に立ち上がって出て行くのを見て、墓に泣きに行くのだろうと思い、後を追った。³²マリアはイエスのおられる所に来て、イエスを見るなり足もとにひれ伏し、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と言った。³³イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮して、³⁴言われた。「どこに葬ったのか。」彼らは、「主よ、来て、御覧ください」と言った。³⁵イエスは涙を流された。³⁶ユダヤ人たちは、「御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」と言った。³⁷しかし、中には、「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようにはできなかつたのか」と言う者もいた。

³⁸イエスは、再び心に憤りを覚えて、墓に來られた。墓は洞穴で、石でふさがれていた。³⁹イエスが、「その石を取りのけなさい」と言われると、死んだラザロの姉妹マルタが、「主よ、四日もたっていますから、もうにおいます」と言った。⁴⁰イエスは、「もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」と言われた。⁴¹人々が石を取りのけると、イエスは天を仰いで言われた。「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。⁴²わたしの願いをいつも聞いてくださることを、わたしは知っています。しかし、わたしがこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです。」⁴³こう言ってから、「ラザロ、出て來なさい」と大声で叫ばれた。⁴⁴すると、死んでいた人が、手と足を布で巻かれたまま出て來た。顔は覆いで包まれていた。

イエスは人々に、「ほどいてやって、行かせなさい」と言われた。

⁴⁵ マリアのところに来て、イエスのなされたことを目撃したユダヤ人の多くは、イエスを信じた。

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

説教「ラザロの復活」

神学者のカルヴァン（1509-1564年）は次のように述べています。「キリストは、懇願されながら、しばしばその援助を遅らせている」。これは、キリストは救いを懇願されても、すぐには救いの手を差し伸べずに、助けを求める者をあえて待たせることがあるということです。それは、私たちの忍耐と、真摯に神に祈り求める心を養い、私たちを霊的に向上させるためです。

そのため、信じる者は、神の助けを願う時、速やかに救いの手が差し伸べられないことがあったとしても、すぐに諦めたり失望したりせずに、希望と望みを持ち続けることが求められるのです。私たちの祈りに対する神の応答がたとえ遅れるとしても、神は決して眠ってはおらず、私たちを忘れてはおられないからです。

本日の福音書は、マリアとマルタという姉妹が、瀕死の病人である弟ラザロのためにイエスに救いを求める場面から始まります。しかしイエスは、すぐに姉妹の願いを聞き入れてラザロの元に来てくださったわけではありませんでした。

ベタニアの地でラザロが病の床に伏せていた時、イエスは離れた場所にいました。使いの者からラザロが重病との知らせを聞いたイエスは、「この病気は死で終わるものではない」と答え、すぐにはラザロのいるベタニアに駆けつけようとはせず、なお二日間、おられた場に滞在します（4-6節）。イエスのこの対応は、少し冷たいものに思えるかもしれません。しかしイエスは、ご自分の行くべき時を知っていて、その時を待っていたのです。

この場面より前にもイエスは、カナの婚礼でぶどう酒がなくなった時に、「わたしの時はまだ来ていません」と言って、ぶどう酒を求める人の願いにすぐには応えなかったことがありました（ヨハネ 2:3-4）。

神に助けを求めて祈っても、その祈りは聞かれないと思える時があります。そうすると私たちは、祈っても意味がないと思い、神に祈ることをやめてしまうかもしれません。しかし、来たるべき時は、人間が思い通りに操れるものではなく、神の御心のもとにあります。来たるべき時、すなわち「神が定めた時」と、人間が自分の都合で望む時とは、必ずしも一致しないのです。

ラザロの病気の知らせを聞いた二日後、イエスがラザロのためにベタニアに向かおうとした時、弟子たちはイエスの身を案じてそれを止めました（7-8節）。ユダヤ人たちがついこの間もイエスを石で打ち殺そうとしたからです（8節）。それに対して、イエスはこう答えました。「昼間は十二時間あるではないか。昼のうちに歩けば、つまづくことはない。この世の光を見ているからだ」（9節）。

昼のうちに歩く、光によって照らされた道を歩むとは、神の御心に従うということです。

またイエスは、「昼間は十二時間ある」という言い方をもって、昼にはやがて終わりの時が来ることを表しました（9節）。それは、間近に迫っているイエスの十字架の死によって、イエスの地上での時の終わりが近づいていることを示唆しています。

イエスは、ご自分の残されたすべての時が神の御手の内にあり、ご自分がただ神の意志に従って歩いていくことを語ります。

そしてイエスがベタニアに行くと、ラザロは墓に葬られて既に四日も経っていました（17節）。イエスはそこで、死んだラザロを生き返らせるという奇跡の業を行ないます。その時、イエスは冷静にそれを行なったわけではありませんでした。イエスはラザロの死に、心を激しく揺り動かされ、心に憤りを覚え、興奮し、涙を流したのです（33-35節）。神の子イエス・キリストは、苦しみ・悲しみ・怒りという、人としての情感を超越した存在ではありませんでした。イエスは血と涙を持つ人として、ラザロの死に涙を流したのです。

「イエスは涙を流された」（35節）。これは、私たちが、大きな慰めを受ける箇所であると思います。天上にはもはや、死もなく、悲しみも、嘆きも、労苦もないでしょう（ヨハネ黙示録 21:4）。しかしこの地上には、なお死があり、苦しみがあり、悲しみの涙が流されます。ラザロの復活の奇跡は、ラザロの死を心から悲しみ、涙を流された方によって初めてなされた業であったのです。

ラザロは、墓に葬られて四日も経った状態でした。ラザロの姉妹マルタとマリアにとって、もうどうすることもできない絶望的な状況でした。人間の目にはもはや終わりだと見える時に、奇跡が起こります。奇跡は、人間の絶望に対して差し伸べられる神の力強い救いの業です。救いの喜びは、一度絶望のどん底に沈んでこそ、真に感じる事ができるものです。真に悲しむ者こそ、幸いであり、その人は慰められるのです。

さて、昨日は春分の日でした。春分の日、昼と夜の長さがほぼ等しくなる日です。一日二十四時間の半分は十二時間です。春分の日、イエスが「昼間は十二時間あるではないか」と言ったことが思い起こされる日でもあります（9節）。

この地上での日々の中で、いつどんな時も私たちには昼間があります。夜が二十四時間続くことはないし、また、昼間が二十四時間続くこともありません。

明けない夜はないし、終わらない昼間もないのです。

私たちは誰もが、いつの日かこの地上での生を終えます。

フィリピの信徒への手紙 1 章 20 節で、パウロはこう記しています。「生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストが公然とあがめられるように」。

私たちは、この地上での生を終える時、自分の人生が、神様の栄光をささやかでも表したものであったと思えるような心の在り方、生き方を試みましょう。

私たち人間は、自分の人生を振り返った時、過ちや後悔の多い人生であったと思えることがあるかもしれません。

しかしイエス様は、そんな私たち人間を丸ごと愛してくださっているのです。

私たちは、生きていく中において、辛いことや苦しいことがたくさんあるかもしれません。しかし、一方では必ず、良いことや嬉しいこともあるのです。

神様が、いつも私たちに恵みと祝福を与えてくださっていることを覚えながら、私たちはどんな時も、神のゆるしと愛の内に、希望と喜びをもって共に歩いていきましょう。

お祈りをいたします。

天の父なる神様。私たちが、あなたの到来を待ち、あなたの愛によって私たちが愛されていることに委ね、困難のある時も望みをもって生きていくことができますように。御子イエス・キリストによって祈ります。アーメン

***** 説教ここまで *****

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

旧約聖書 エゼキエル書 37章1節—14節（新共同訳）

¹ 主の手がわたしの上に臨んだ。わたしは主の霊によって連れ出され、ある谷の真ん中に降るされた。そこは骨でいっぱいであった。² 主はわたしに、その周囲を歩き巡らせた。見ると、谷の上には非常に多くの骨があり、また見ると、それらは甚だしく枯れていた。³ そのとき、主はわたしに言われた。「人の子よ、これらの骨は生き返ることができるか。」わたしは答えた。「主なる神よ、あなたのみがご存じです。」⁴ そこで、主はわたしに言われた。「これらの骨に向かって預言し、彼らに言いなさい。枯れた骨よ、主の言葉を聞け。⁵ これらの骨に向かって、主なる神はこう言われる。見よ、わたしはお前たちの中に霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。⁶ わたしは、お前たちの上に筋をおき、肉を付け、皮膚で覆い、霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。そして、お前たちはわたしが主であることを知るようになる。」

⁷ わたしは命じられたように預言した。わたしが預言していると、音がした。見よ、カタカタと音を立てて、骨と骨とが近づいた。⁸ わたしが見ていると、見よ、それらの骨の上に筋と肉が生じ、皮膚がその上をすっかり覆った。しかし、その中に霊はなかった。⁹ 主はわたしに言われた。「霊に預言せよ。人の子よ、預言して霊に言いなさい。主なる神はこう言われる。霊よ、四方から吹き来れ。霊よ、これらの殺されたものの上に吹きつけよ。そうすれば彼らは生き返る。」

¹⁰ わたしは命じられたように預言した。すると、霊が彼らの中に入り、彼らは生き返って自分の足で立った。彼らは非常に大きな集団となった。

¹¹ 主はわたしに言われた。「人の子よ、これらの骨はイスラエルの全家である。彼らは言っている。『我々の骨は枯れた。我々の望みはうせ、我々は滅びる』と。¹² それゆえ、預言して彼らに語りなさい。主なる神はこう言われる。わたしはお前たちの墓を開く。わが民よ、わたしはお前たちを墓から引き上げ、イスラエルの地へ連れて行く。¹³ わたしが墓を開いて、お前たちを墓から引き上げるとき、わが民よ、お前たちはわたしが主であることを知るようになる。¹⁴ また、わたしがお前たちの中に霊を吹き込むと、お前たちは生きる。わたしはお前たちを自分の土地に住ませる。そのとき、お前たちは主であるわたしがこれを語り、行ったことを知るようになる」と主は言われる。

新約聖書 ローマの信徒への手紙 8章6節—11節（新共同訳）

⁶ 肉の思いは死であり、霊の思いは命と平和であります。⁷ なぜなら、肉の思いに従う者は、神に敵対しており、神の律法に従っていないからです。従えないのです。⁸ 肉の支配下にある者は、神に喜ばれるはずがありません。⁹ 神の霊があなたがたの内に宿っているかぎり、あなたがたは、肉ではなく霊の支配下にいます。キリストの霊を持たない者は、キリストに属していません。¹⁰ キリストがあなたがたの内におられるならば、体は罪によって死んでいても、“霊”は義によって命となっています。¹¹ もし、イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてください。

教会讃美歌 71番「とうとき主イエスの」、76番「恵みの主イエスよ」、256番「すがたは見えねど」、333番「やまべに向かいてわれ」。